



140 1 2 3 4 5 6 7 8 9 150 1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9

貴  
14  
3163  
35(3)

滿沒因捨送立歎

初立

ゆく水をまのめんにはまつまと、高の原へ  
阿寺をとむるをさかねてみゆみへりそなみゆる  
さちをまつまくせうゆめりきくやく人をアシカのつる

思ひやうむ乃づまひまきよ風よまくに生ちあらん  
ゑはまくとを賣せまわしむ風(ほ)すあるぞ

芸忍堂

人言乃はるゝ生をよみかうりたりすよまよすよ山あひと

意のうこぐるふ

よしやのすのしけまよまうれすかくらはまく人よか  
ゑくはひすくましもとくわがだまぬせまく

未言意

黒い事のれは被まことあんじゆくにゆくよおへく

不言意

すすすとせきを激川くわうちよむせひそをまし

待意

タクセハくましきむのよかくむつをあき人とまつろ上風  
居とのみまようりてあちあるみのゆゑとがふくらば

思候意

かりとれ芦乃まよみれひまとゆみ主得くもとくも

秋待意

あくろの筆あひきんちく葉せきよほくめくあまぬ

達意

あやめは夏うつよすくまくよまくまくまくまく

初意

ほふほ乃実後ゆきんまのあハヤシモナカホラ後形まく

夏意

まづまづよだり人とあめねねめめーとくみみきみ  
うくもアキとくめぬまくられハまのうちまあぬとれき

旅宿意

おはなはなーくまくほめうーき人のたまくまく

適意

とく月を原のまゝかとかのまゝあらぬれ度の花とる

元急

葉く風くわらやまのあやめハさよかねだりあう

元始急

葉く風くわらやまのあやめハさよかねだりあう

は始急

ひよき風く博きハさまる風く風く風く風く風く

入つて

かくは風く風く風く風く風く風く風く風く風く

人つま

あめあひ人のせの女郎も見る、うきへさあきがん

れもつけ

まわぢ風く風く風く風く風く風く風く風く

不達急

うゑふきのうちあせはあぬすに風く風く風く風く  
風く風く風く風く風く風く風く風く風く風く風く

うむとあ

うむとあく風く風く風く風く風く風く風く風く

行不急

七うゑうの移く風く風く風く風く風く風く風く

行急

下ひよあたとく風く風く風く風く風く風く風く

風く風く風く風く風く風く風く風く風く風く

おもひやハ名ヤハモトさんあらむたくまは心は心やほき  
玉をみだれひきとくせのゆれ人よあらうゑはーあら  
ほうおおまろ度のまうるれや夏ハねこよあらうそ

雨 無

あらわれやみんやがる都ろきハうがるういもるうあ  
れよみさくわたえは何ん何とくううあつる

初 無

えくとせうすれ山のまめ人をもとじうきよナセ  
すりとすき方格ハ死かくとれるあくのアレキス  
あまほいのうくとあつまつゆの神御うりよけうな  
うけとそへのるやーうくちくめしにましとゆくと

憑 芽 無

地あたうよゑすかまう福よ可へ蓮とちからをかけ

未 不 完 無

もひまつわらのこくくゆりせりん方せうろりと  
遠くまづみよゆゆあでこみゆふ心をつゝくはん  
いきんせうこせん房もんハゆぬにのみ立くもん

警 運 年 無

まえんこくくわくわく竹もくらやさんくまくわく

別 無

あらわれえつとよ一かはるあらわれはる  
とまくぬよまくぬりのハ嘴りふのうむれまくわく

情 别 無

つづくやうれうか一かはるまくわくよやまく

山居

人含むてうみく今たせんとえ  
あらわすとやうのうえふをこころむ  
アヤムリシヌホ人よかひくやうくむ  
ウロハ遠きとくづりはくにまくはく  
ハ

批書假意  
あまびかくせひそかく玉つとまくわんじゆはくもぢてらて

波返書も

うよさんあめふたるやば  
うよさんあめふたるやば  
うよさんあめふたるやば

舊年立

波忘之

思ひたえ難くうれしきとゞよれあめつゝまふゆとづまふ人  
がまゆの寐や乃すまゆのこすれを今はおもひやきを

旅也。心事久々にりし宿や乃うよや數さへまく乱草より花

卷之二

元  
三  
かくに及  
けりまふ  
かく月也あ  
まくとく

妹、せうひをかづくれきよむるやあらそとゆくほこてるおまむ

春あ忍意

青扇うつすむはりう船うるうきぬ人うてへとせは

里

まへとくもまのめおまえよまは御うる

序曲

おもや御きまとれりんむ竹まきにまちを

後歌意

望みれりうれしの御よし和ハリマサニハ  
もろみにかきうれきゆくろがくぬ御いふて

裏意

よしおおひん乃くわゆかまくら多す神と燐づれ

假意

まよより多く絶筆がくらあめれひくすなりよるうか

遠意

おせあやまつてハキムシカキムサヒトシのちおもて

近意

中筋うじくはりとつもよてゐる身りそばううける

あた意

山うよえあはせはまち一あやあわはれうけ

深志意

ゆきまこととくと林のれきをよゆせうく

念歌意

ゆやまくこまくとくと林のれきをよゆせうく

緋意

あやへうとむよつまゆしをもんじきてらる

恋月

みちにりめまゆとすゑれはなまゆがのとせき

立里

えはまかまくわくわくわくわくわくわくわくわく

恋衣

よきこねいとくまゆを拂ひりはまゆがまゆが

恋色

おちゆはまゆまゆまゆまゆまゆまゆまゆまゆ

恋地

まちはまちせまちとまちまちまちまちまち

寄月恋

やみへばくはくのまくはくを抱とづのまくはく

ひくたりまくらはれあだくくわとおりゆせけ

恋風

そがぬまみねくまみねくまみねくまみねくま

恋雲

天ほてゆふくしてはゆふくとよしやまく節季  
ゆきふくゆくわふくゆくわとくわやまくはんゆのゆき  
ゆきまくわまくわまくわまくわまくわまくわ

恋雪

げひりうてぬわいりがひりうわいりうわいり

恋雨

まゆへまゆうまゆうまゆうまゆうまゆうまゆう

恋雨

春の日はまだまよたぬ身されば思ひよアシテ神ハぬれど

すすまふ

つまうも思ふもまたあわざりてかうきの心のむすびを

すすめある

おもひうるまうひうるまうひうるまうひうるまうひうる

やちまくにゑみへるやくだら花のまほはすよきぬわ故

ひくくすめくとまくめうすめうすめうすめうすめう

すすめ

いきえれねのまくにけふうのすえまくにけふうのすえ

すすめ

もう人をうそまきのまうがまうがまうがまうがまうがまう

すすめ

見ゆ候ごときをうちれあますれなれれくらうとむくら

う様の人のよこととくにまくつあくあくふくとくく

すすめ

おひよのうとうはの八様の歎きくやううううう

すすめ

ふく候ぼくさくせうる門戸アハセうとうく人すまん

すすめ

一そもいそまよみうまつてはててはててはててはてて

すすめ

がき石引とくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

お身立

書く所ひきとまのへうちをれまをうぢるかくみる

お後立

古がくちのねぢにうぢれまをれまをうぢるかくみる

お歌立

わらうせうかの歌のをすよもまがくそんのせうせう

お身立

うすれこじ山うきまくまめうじうくわぬきの  
河かみかのむのまよさんかたわあつひうせうくわくとせん

お歌立

わらうせうかの歌のをすよもまがくそんのせうせう

お玉立

うつれせうかの歌のをすよもまがくそんのせうせう

お送立

遊はれすくまうまうまうむろおゆふよたぢう

お車立

うきのとくに車よつよやうかうまうとれやうかう

お波立

人よハあとこくしゆうとくらむまうとれやうかう

お林立

かきれ市よこいとくらむまうとれやうかう

お本立

まよ本よううらひゆとくらむのせうせう

15 挑々と捨遣雜事上

曉

松くそくを教へば何種に曉乃かいが極めず時もたゞへぬ  
かくそくからあらまほ萬の御事かくせう徳能りけ  
キテシテを氣うハ明ゆ是とあふくさるく行の事無

曉

竹の枝を相方やと相處を先きしゆくうばくやう

曉

大乃れりもよむむちうきにひりあめたるやうにひき

巖上曉

山乃れりもよむはゆきを喰むれと故すれども

曉文鶴

やくはのゆふはまゆらうすすまのむかひつゝみ  
えよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

塩屋烟

り春がれ變もとくすとくあはき色の煙すされ

遠村烟

もーちやくけの事よあつたくさくまのゆうけいん

赤雨

タキトガリ印ふとおのすくまかせうにうる

赤叶

斧方えハ松く皮うくちぬしめんとくとく様るねを

涂山

色うだハ市むちまく海きよのわくくく四角く多能

鐵水

志とむよく了教ハ水の心とくあまにそき開つばま

山牛

つひ森乃清うをまくまくと心よむをみづうつて  
杉山乃よまれあく波あんまくおき一水よどくぬまく

流水丸糸

うこされき岩がれよえうれぞ柳くしれいと

山

大夕杖乃山の一つれあうとぞ大あわうとうきくらめ

野

走れ音すねくまにとくまきをとくあはれあはれたま

山れハ行方聲ホトコノヨメ本はきりうり御事ミタマシテ冬ハさひうり

水樹多佳越

あくまちたてアカムチタテおもと風アモトフウおの作アノヲツ「山」ヤマ

路

あくまちは西アカムチハニシもんを極ヒロけん峰ヒラタケ名アメ火ヒア

あくまち

かくまは孤波カクマハコボめりメリすあくましゆアカムシユの峰ヒラタケと連ツネつ

名小室

あくまれ支アカムレシ一イチ波ハモアキラアキラハハアレアアレア峰ヒラタケみミトト

名小溪

名食アメシキやヤおオかカのノ里リにニ洞ドウのノまマとトみミをヲはハ

浮島原

あくまや重アカムヤヒヂおうれオウレうウせセよヨ一イチ波ハモさサうウうウあアくクすス

清元溪

あくまや清アカムヤシラ元エヌをヲうウにニまマくク月ツのノ舟ボウをヲあアくクるル

伊吹山

あくまや伊アカムヤイ吹ブ山サンをヲうウにニまマくク月ツのノ舟ボウをヲあアくクるル

音羽川

あくまや音アカムヤイ羽ブ川カワをヲうウにニまマくク月ツのノ舟ボウをヲあアくクるル

伊香保沼

あくまや伊アカムヤイ香カ保ボ沼ヌガをヲうウにニまマくク月ツのノ舟ボウをヲあアくクるル

佐田森

あくまや佐アカムヤサ田タ森モリをヲうウにニまマくク月ツのノ舟ボウをヲあアくクるル

萬葉集

あらわすまことにまほらの事は常てぬまうけ

三津浪

大とおれ事は乃度もうとよ  
心ハ仰にあひや（ゆゑ）

卷之二

あんえい夜すゑ衣おきよひのゆの月了せり

支那の

卷之三

可かれどもかくこゑあらんふ。波音なみのねへまづかうておのう。やまくらわ

浦角

むごれうへみへくは  
波乃上りふるあくは

卷之二

さうして がやくことなりむきは運びぬけられ  
も人のわざとあらぬものよつうあうてはとせへまくる

あ  
か  
れ  
の  
よ

日  
月  
火  
水  
木  
金  
土  
辰  
巳  
午  
未  
申  
酉  
戌  
亥

湖  
南  
桃  
源

まみやるあいさとあくまきをせんじゆは

アヌモトミコトニシテムハ御前をみ乃御之處に

胡 鵬 章

ちにちにあすりアリテ御のりみのいとアリ

原上紳人

ナムケアツクはアリハタマニシテアツクセアリ

風吹のる

サキヌ秋のうつを思フニモキサル院の意

宿スヒテアリ

よ人のよちや往ハミタシタマキヤの金ムシハシモ

橋

ミシヨリのちに草木のよきてやくのふの意は

河

仲(ちゆう)モモシテ生田川(なまだがわ)アリモして水をかのけふ  
アシミ絶(ぜつ)ハシムの極(きわ)ミテリカ岸(きし)の内(うち)の茅(よし)干(いし)

絶(ぜつ)川(がわ)アリモアのゆへ生(なま)れ於(お)りてまかねける事

名石河

名(な)川(がわ)のえはまみそり水(みず)下(さ)まやきハよれん  
い行(いり)へのめれう絶(ぜつ)川(がわ)アリ水(みず)アリ

河水(みず)清(きよ)

井(い)上(の)みのミカラヤうまんまくまくの水(みず)が流(はせ)る  
川(がわ)アリ何(なん)うづくほの麻(ま)根(ね)んとまちハ月(つき)のうづくほ  
高(たか)い川(がわ)アリ水(みず)の運行(うんこう)のあらうすまか岸(きし)の川(がわ)

長河(なががわ)草(くさ)

あはれやむれりする山(さん)河(かわ)を秋(あき)ノ月(つき)の

ちみ所

強きくたをれまほの敵へあらあ支のくじ

何代

紀乃川より代へすくふりせの風のむだち

赤水難

下りよつを落れかのまとはさ心をせよ仰きけ

行市

かくまにゆきて捨てまつる今日ハ矢引の市まはん

ゆくにあはるにあすが未れおぬ月よあさましをき  
色夜の空のまきこえ山がおせよとびく也

冥猶毛

此すのかとを清らつまなは一却やまへてうる

冥猶毛

やふしぐぬゆめねまわあまも冥もがれまあねか

冥猶毛

筑紫道方りれやまやの夕經やくもむりそはのくま

あく

ゆくに能知どくかくかくはうもすまに朱より

古寺鐘

井の音くみかの駆波の音くに苦くのまそまくら  
人まくらまくらとくまくらとくまくらとくまくら

石をもむらまみ一ちはれの多めりうき縁の音が

山家

山の音よりてかたはくよしにじよすまやがま  
えきれせのうゑのスミミえにまくらひへよし乃あいか

山家曉

木落くくゆこまを山陰すきるかくはたはうり

山家水

よそすくいひうつむと身りよ生たむのは共めにたあ  
つさうふれ水よなふきにほもよするいゆふのうす

山家風

よそもつ心よきはよれひ吹とそ一や花をもうせ  
せよ一ぬ風おれくそはくう花ひふくわふれ

人をもぬるまく葉乃アハ風ひよみてゆきよらる

山家夏

うれにハ風やうりを先のねくもまと扇く

山家烟

人ノ煙まほゆのスレ物たちは乃アトヤマレヒケ  
のまくえろけむるくちに極ひふくも入くもくも  
烟よろとてあはれくもて入くらのうひやあくん

山家烟御

たちが不教りばかりのまはあう煙をかくひと等  
えはひうけろいやまき山の心不くわからばれ

山家詩

山家れ思ひえん道くえすり今はませを詠えよ

山家経

多聞の内に思ひ出されり  
五年をへてかくもありよけん  
山家の人解

山東人稿

卷之三

まことに、おまかせをうながす。おまかせをうながすには、

卷之三

ちやうへあやをせひ行ひゆくゆるのれと遠くおも  
まくみはね稻葉がおもてよせよおめ拂支や萬の星  
大さか乃の内もつゝ風も水薄く春のよれか打立えんげ

國朝文

前書きのまはうをかへる所  
ある。必ずしもあらわすを山田

國家通

小風とやか  
あん門の  
能手がわ

さうして、うそとほんとうのうせ見えがまへる、ほんとう

楊氏

よだれのまゝ今まうすきをあけも様のうのま  
枝のまゝにけりれ様があめのうへりま  
がくまはこのせり

卷之三

立のやうな芸乃玉うりおぼきは人めれりとす

序(遠)篇

一立のやうなよさきは高き立とまつて立に立る

松年久

立のやうなよさきは高き立とまつて立に立る

夏松遠家

立のやうなよさきは高き立とまつて立に立る

松影勝治

立のやうなよさきは高き立とまつて立に立る

嶺松

立のやうなよさきは高き立とまつて立に立る

洞松

岩立えを立をばよだくせは小松立にむかうる

峻松

立たつれゆ中のかきぬれひくわ行を経て生ちめん

海邊松

ゆつをあきほくとまれられ残山松ハ片あらき

浦松

ほテアうれゆあらう獨坐よりうおみの松もあやまん

残松

一方に麻ぐい立の浦松ハ片あらき代を拂よ來て

遠山松

山遠山松ハまつもとゆのよそぞれい方をあ避すくる

名木松

ほまれまつのもとせれぬ。元とくひてもあらはる後のもと  
あにすれあともまつの足弱とをかときたとどもさん

間模

谷、夜とて無歌があわせやうる松の梢ねりけりやなり

杜 拍

ゑつねりれいには本草を序し月とへりてそくにりる

社頭於

山すみひづれ放をきり。下り今ハあつ枝をお今を折

お今木

うきくをる人をとあき能がくれひのまハ秋もつまきさりくら

きりく さくつてくま

春あくにれすめりは松よ壁くるかとまかふくにかりよ

あやとれ老木乃きくくちもせとく。老木よあふ。れを  
まきよひろはまくわく山妙きの花吹あくすりよけふうあ  
きくぬまやかくに葉しら竹乃葉もかくに葉も  
河内山のねうちうもとくれえくにまへまよ計李  
はまよやれくちう山幸れ庭のさくはふひくもの  
もひ人の川よしる家門の柳れはは先せらうと柳  
花ふれまくはまくううひの聲が身を折るうけ  
かくにちりゆまよひく様をまづへもあく吹がりよけよな  
さくく吹まれやとものがくりとくせはくもとすくまくまし  
く風ふく山をくわ様をまくりすぐれとんふくもくし  
まくすみは影す一画る松はまきのえはげけがくけを  
まくされ吹まくの山風とすれはれはけくまくまくまく

西山を越へ瀬戸と白川をまたま清流をすけり  
さうの瀬戸小川乃ゑむよすまふるれ月やれふ  
きやる月のえま是處をはせたり原へ立ひよげて  
ゆひきがあつまゆすりけの小島をわらひ 所  
様くも瀬戸やとやか也石にれりあひのう林  
河奥のみ山のれくもうがけにまほのれのほつがみ  
す更につとどよよきをまめよがくと音をちまと  
されよう波よ駆るをりこりよがりおもねき林  
多く人のうちよ駆くもえくまくまくまくまく  
こと生れまの若木をとめくめくめくめくめく

窓竹

立まきと人やなまんねつゝ行ゑの方は高はあけり

たてまきと人やなまんねつゝ行ゑの方は高はあけり

簾竹

竹葉遙年

よしめにうめまうきの葉行ハゆすあくにめくみよ

竹葉遙年

よしめにうめまうきの葉行ハゆすあくにめくみよ

風やねにまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
様うやあせねうあせめねううたくまくまくまく  
なせる竹乃葉うそ其葉も緑をたるりや青  
せれうううめくめくめく

五月の月をやまにうめくらほ行をやまうく

鶴

あやたすらひの鐘をうちをか年やうへうむん  
お代りへよしんがなうきひをかく原れむ／＼や  
明るくまほはいとぬ波うとゆくりかのつむ  
め／＼かわせもえが何うせんせんばゆうてうきせん

時天鷦

あれはむかきされすまにあひやゆんの村む

宿宿松

もこことむちとせきのとあ／＼のやぶるねはたの

鶯鶯

お代り／＼あ／＼りまきをけ／＼のま／＼む／＼お／＼

名不詮

けのま／＼お／＼ま／＼をく／＼や／＼のま／＼け／＼

あ／＼う／＼候／＼するね／＼よ／＼し／＼お／＼

曉更鶴

今／＼れ／＼お／＼は／＼く／＼ま／＼は／＼そ／＼と／＼

を村鶴

ば／＼と／＼あ／＼も／＼み／＼ぬ／＼あ／＼く／＼せん／＼

白鷗立鶴

引／＼の／＼の／＼た／＼に／＼あ／＼く／＼け／＼の／＼ま／＼

に白鷗立鶴

あり／＼お／＼は／＼と／＼あ／＼は／＼よ／＼も／＼お／＼せん

お代り／＼お／＼お／＼あ／＼は／＼お／＼お／＼お／＼

指猿

本あり尼ニモ多よアれ山猿乃すやきハあや行かし

神社

天つ神あつて「ろまき」ゆてる、代をくどりいもすん

神祇

石像水もあうの月比翁をうらかがまみれき 神靈系  
う再よにハ神えみを奪はげば空アの空ま天のまひくひ

曉神祇

とめ大ハまおきのこれ神也よあをましげりハよま

社臣役

若叶一葉ほどあきる花粉也や秋世のニ葉吹し

社臣林

はの風れおほづられ、夜もよとま柳をにゆのまく舞

寄社難

石浦より神も仏も互も互もあき影をそんゆ程する、代をひそ  
ある年さう事多く、いかしこれ大社角  
勅使ふとぞを経ふやあけびすり

御もまく神のみちをひき日本一人數百人すゞく祈らきめや  
三十番神又すむじる松を庭まへまく生  
葉えく新をわすれまじりと瑞柏館と  
名付く人の方ぞく

神うちもむきに寄もむくとまやみゆくと  
或人のあくる立葉乃ね乃

そらのぬまむじのうそせれとまことふ代の隕ハ云れ  
寺子所國へアまし才くまぬまぬまぬ

象頭山推測よ三十度左を許すが為弱  
欲乞け候へ等一び取

致乞竹枝歌  
丁未

かぢりまくらのとよとよきわら

或人の賛

正積り四十枚  
代乃包み紙

伊豫の國人七十乃賀

第一回  
萬代はたえくらがくとせあ湯乃ゆきをまつた  
幸多氏七十の賀の屋風早苗植五月のやう

豐後國人七十之八十之支那うら賀

あゝ人の聲

三

又

七

古

43

様のうちに之を代二人にへよ

お龍う子お發うる祝

さと山中くわら月一からよきを残すの影あん

瀬戸物産某ノ利發

ア葉發ちひるてあ代かへき歓アの客ハ形はす

八月十五日發ちひる

黒望とはくわそ大さな歓月アすと形あや

六月九日ニ楊柳雲々がり、おう、も

み初月の候がたれもあづれとしらぞえせり、涼、

兵庫人おキと云々大塚氏の男子むぢうぢう

新祝のうを

玉げやすむくわの名すけり御すけやせ聲の友君

泊瀬川氏子産せられ

けり西二本河ふねどくう生まづけよ尼やうちう孔

幕井氏ゆね十賀　吉祝

波花をつれあぬをゑあみせき筆をゑよしもア花

七十賀ヌねる鳩林ヌかいア

かき立き立つやセのゆけえぞうりこととひを繋ぐる

六十ヨドリテムアシ祝のうとてれとう

ちうるひとすとみのとおりなやく玉の波せく、我やの花

信外人七十賀 寄叢祝

降雪あらゆるみをうこうかうのちくをあらう先

初春祝

さとむ新築がつるまゆれとすとくわらる代えをう

夏祝

火口草ツシムタカホノミニモ 鳴鶴也 六月の事

秋祝

寒津祝

御國はつての神の経きく者人まもろひぬり  
まうり又ちづくへよアリキモ詠きくや神とくさ

社政祝

御御神代ヤリヒニ行テモアラフ代ワツサガタリケレ

寒日祝

室代と祝とおハスメアリギハジクリケヨウ耶

寒花祝

かうりなきもとをかくで歌花とあらうまと何事

寒弓祝

めうとう作と合せとえくち世ハヌアトニキナリニけま  
あうとうとあゆまるあたりにハ儀うきそひくヘテ

松経年

ひうちたさく斜後よりは宿の松の行枝ハソアリケル

鷺芦避年

りうち方よすよやまくをあせふみへハモリシル  
鷺全千年あ

かにてんうあをせんのあくそスソレモ代ウシロアシル

心静延年

えとまかき山石いもむくもくすてててててふ代ハたのつかれ

寒山祝

そぞはよりく雪かのふみつむとれあす

あ水放

ゑう代のうきぬすへてかのうけ井をほそくふ  
ゑばとまわの雪す水れはこひにてほんとせよ

後言

あらめことねむりとく案にあせへれもてよし

後言通

ちく経はみのむね神つれを祈ぬまむよし  
ふう乃人ハの聖母象也めあり

ねむふちとわすて高野山のんうきよもるの

山崎氏七十

西と東の時を今すとく代えなれあつ都は

あら人の賀寄松祝月を

ちか數もまことと高妙のね葉すりりあ等さん

葛山大和上七十賀

玉引けの歌ははりびきりのと人のうを拔け歌をくん

三井寺彌有卦入れ祝

どきか歌序もくはの七曲麦考うれ生めんのくわん

牛坂君元服の祝

武まゆゆのひ反色もゆみ草の霜と結ゆりと

丹波あま親民うちり文子中にとある者と

うつてすまをう孫とすもえがく歌を

とくとく

さされをなす思とお見ゆ形とゆとまとまハ歌をく

立鷦支才十賀 三一至月前

天子と御心を有る事アハ市に従事へまつて、以市而人

井坂氏七十賀 泉屋と名

山ノ井又ふれつ事の度ナシテ故也人方ナシモ可

大山氏八十賀

ミリムニシルナリ、ちと先越く多幸也。即ち其  
儀後尾宿宣賜、年賀を乞ひ歎む矣。ハ  
乃西海と申す。

ミリムニシルナリ、即ち日向伊藤守正けき事、能を

松平氏母と年賀 子日祝

ナシムナリ、ナシムナリと申すは、猶也。但し  
母波葛義と之二人才賀

居る者ニシルナシ候乃ま此花あり。ナセは立ツツヘ先

泰永紀元大嘗會行けり。法國石室神

モ豊年の事也。有ノタレハ

ナシムナリ。ナシムナリと申すは、猶也。但し

寄道祝

ナシムナリ。ナシムナリと申すは、廣く。余ナゲリ。多  
せ乃人ナシムナシムナセテ獨處く。即ち申すが如きも  
天ナシムナリ。ナシムナシムナセテ。故云乃等の道

寄道祝

居り代ハツトナリ。ナシムナリ安れふ代 やや止る

長榮寺ナシナリ。ナシムナリ。盆蓮三月廿日祝

喰切子をあそハ又ハ忌十首ハ母ナ忌ナリ。其

さくらの歌

さくらの歌をうたふとれせまことすや千鶴より計季  
母波矢因より實達所よひやま

水多木村をすすり山川ハ流乃木よよことアリミ  
皇子うすすりうせり一子翁爰よだらとて

あけまむらちくにとて

夏まむらちくにとてとくがようよとくは  
あくうかくら詠多めぐくうきくすみすみ

書もまよひのせの歌あり

みゑく峰高野中和也ハヨリ歌とて計  
伊佐高橋氏志妙追悼の歌を乞十年後  
昔我輩不景氣ゆゑかくめを人難易

よとおとけよとよとよひとよ

家おととよれよせぬねつよおちんせよがくやけ花

寄花情旧

みゑの花ハヤハタシムキヨモ居つほくわからうきうけ

かく情旧

峰高野中和也よとよとよひとよひとよひとよひとよ

風景情旧

いわおとよれよせぬねつよおちんせよがくやけ花  
徳大寺公連公連公連十七曲情旧

かくはくすくの秋あくやくそくりおもくわせり

常樂寺初月忌月前情旧

生明のりはやくしめくりきく形の影こうう葉うせり

仙光寺遠三因 暫寓尊夏

居キテ ちとまどむとおらりはまよこくへて ほれ  
書家上田藏田女六十回追悼

秋常ツアラムハルヒノミタリテモ 乃ハシバニ  
伊丹ミト事性化孫ニ人毛先ミテモ そ  
シカ病院生ヘガタシタク文あをセムリモ そ  
のおり

人多シヨ あきはなれモウリヌマノ後セ計塵  
國レソアリ知情化モ文有リテモシハラシ  
シテ居キトモケト難得モアリ及モニヒ  
アリモアセ

乃行難はまきシテモ 世モハシハラシ

茅津山田氏追席 寄花舞事

ほひくめぢう氣はとまく歎慕の傳モウシテ、うけ  
西日ノミヅメに上雲氣ある故志入大穴守る氣  
アリ先多ナリシの併ゆくサ幕する事也  
う舞の氣者あらず、だら風乃至モトナシモクシテ  
玄鷲支事あがまうげをうよひき、  
ちふるをうゆゆうり修ムニキテ、まおむろか能  
ばくよま華アリ、モキテ、ぬ大穴守る事也、  
シテ、いはく心くす、うむ、痛を修ムリシキ  
とあがまうがりばくゆひくハ年あけまのゆく  
却の御、アシタ一方向やとまくよがハリ、  
セテ

はとせむわがの宅うすアラクチ歌日酒まろや江口  
世音うむすりめもよこかうとくとく乃ふ  
ノヤムシをくわくわくするあらす  
うはやせは生ホハホのゆく所とまき前き  
吉嶽山京よおきく祭神國りとすふ西宮  
其處乃門よおきくいわくうきくあま  
計多をとむ

行のゆるはるかの都事小豆うこみか代とみやゝみを  
吉田別恭友とみよ義よ梅井が金書立と  
ちー女中行と御よめうめうめうめうめ  
和のれはつまく出で歌ひは景人よくせ  
たるをあらゆるにあらゆるにあらゆるにあらゆるに

おのまの片まむかづくは今ひうくするうすきを足ぬ  
梅井代玉の宿よもじり枝く紅梅の花よもじりみ  
うめうめうめうめうめうめうめうめうめうめ  
同一時御前うかくうかくうかくうかくうかく  
利恭死ふ情のうてうてうてうてうてうてうて  
すまセタ歌うよ歌うよ歌うよ歌うよ歌うよ歌うよ  
芳野あう梅井ばれと生せあす  
ま

うみ水井はくはくよすきのくわくわくわく  
葉落人花白度安中郎ア十七回をとむ  
ふをとむ

もほこりれ散らすよりぬづくつゝとての宿す所  
もあひはむとまーまと暮れかと暮えを  
うながすよしの、舟の宿のむする船ふうりう

往事

とやまよあみのまのまごと何乃ひあみあわせ

浮舟めぎ

うどもとててあらゆるむじよはまへうそりげ列  
せうよきことのまはみのあいはくはくはく

走懷

うまやまがほくわんがうひもせんまのやくのゆ  
たゆくは中ゆくゆきせんまゆくはくゆく  
何ゆくはくしけくあらぬもハ別故事をうかく

やまくはくはくとあく時と老よげくはくとあく

夜涙徐袖

うれぬとてうるひも交おおゆはゆ乃りとゆまくん  
うるめりのひまかにうせよハ源のゆきとくらあ

曉眠覺易

あらまくはぬきめうらうら生まげ歌ゑあまむかく  
うきめうりやせよ歎め苦くけれ

えくればやうやうもむくまく市むまくのまくし  
めめぬきにうつる猫のふをあつりまく廣充う  
きたむけにあく思ひあけくま

まくにまくれぬゆれたまくまくとよかねのまくまく

所の追悼寄送懐旧

一筋よきアレをハせむるをぬくとおもひ

二月廿七日沙十曲書簡

ソホシ居りひとてのよ柳のいわきより李  
同 時を度ま水

学書はむくねばもこのよしに波のあわそびすゑ

同く幕生

ほせん草がみとやまくまの日暮も夜をすけり

或人れ追勝書簡

猪木今がちりまちばくちじめの書くもあり難

芝越中守七回夏書

寄卯花懷

何とくれ花とせまくおりゆくあはる宿をげせり

大通寺史書乃沙年四回寄筆書

信をげく

たまセハ日暮れの筆をかくらむ

ある人乃ニ十三回

素をかかつたのよきし世をもんとあらむ

元隆一周懷

あくよきむくはまゆのけふをせうかく

殿御氏つはくらむ

書く事激ゆハム春のれぢめくあひあら  
や人うかねくのよみ志あくしけんをは  
き乃きまといとくとあひう屬かくわひた福

ひまゆく何とかかみよしれりくふまき  
人まうはあくき文ひどくおなはり  
お自ら像よほりまく師も乃すめが  
まうりみいぬとせむるふけりよ今八年の  
所とまうぬほんま春とまくひとくよ  
まうねや獨こちばりし

一年まうくわゆるれとまおまろくらまくを経  
月に春まうぬ春まほまをや君を思ひを

行松マ一園 寄郭<sup>ク</sup>瀟<sup>ウ</sup>日

先づぬおをうむじよく移<sup>シ</sup>ぬしおまくれおま

写新指

同常生

行<sup>フ</sup>とも移<sup>シ</sup>せ園のまうば其<sup>ノ</sup>まをうたうけ

写子氏<sup>ス</sup>姫<sup>ミ</sup>あひ<sup>ハ</sup>れふくおまうけあと文  
多<sup>シ</sup>の林人<sup>ハ</sup>ち<sup>ニ</sup>宿<sup>リ</sup>腰<sup>ア</sup>と<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>み<sup>シ</sup>歌  
に<sup>シ</sup>る

行<sup>フ</sup>まうゆくにあ<sup>ハ</sup>はれ笑<sup>ハ</sup>く<sup>シ</sup>まうくまうく

写新指

かひそちまうぬ歌<sup>ハ</sup>を<sup>シ</sup>まうく<sup>シ</sup>まうく人<sup>ハ</sup>のう<sup>シ</sup>む

み<sup>シ</sup>歌<sup>ハ</sup>は

洋<sup>ハ</sup>れうる年<sup>ハ</sup>歌<sup>セ</sup>る一筋<sup>ハ</sup>草<sup>ハ</sup>よ<sup>シ</sup>よ<sup>シ</sup>後<sup>ア</sup>うり

ほの葉<sup>ア</sup>ま年<sup>ハ</sup>歌<sup>ル</sup>大<sup>ハ</sup>吹<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>場<sup>ア</sup>もに  
まうくは<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>まうく<sup>シ</sup>せり

古<sup>ハ</sup>れ花<sup>ハ</sup>の<sup>シ</sup>や<sup>シ</sup>歌<sup>ル</sup>まうく<sup>シ</sup>まうく<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>

甲<sup>ハ</sup>歌<sup>ル</sup>まうく<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>

天子之使，不以爲遠也。故其使也，必有威儀，如之若何？

卷之三

おまえのものか  
おまえのものか  
おまえのものか

蒙古文

は殺のまゝに死んで、方丈人等

人道

卷之三

まゆには、さうすこくの  
まゆには、さうすこくの

卷之三

卷之三

河東公は其のゆゑたゞにひそむ様子、あくのまゝせうがれ  
焼え乃ち火にやどりて燒きあがれ、かくも東方をはる

おのるうなみの心とみゆめとはれまどけりしけむ  
爰はまへとまく手役りうまくのまが乃丈のまお役ハ  
わ経とまつてまくわまくわまくわまくわまく  
わまくわまくわまくわまくわまくわまくわまく

卷之二

おへりめがひまひてくにゆめむれ  
すみとせよもと秋のほゆ  
すみとせよもと秋のほゆ  
すみとせよもと秋のほゆ

みまへ方見ておもんねりひる見ゆしにぞうかくふれ  
せきよもととすよあおむきくわざくまうみを食そり  
がちよもとすれひきのうのせたけがくよもせせそん  
今さに何をいはれ苦あらちやどくまくわんわく草  
薙ぬれはまくわんわく草あと傳うりにひばりん  
船入水ひよくわんわく草あと傳うりにひばりん  
がくと金と金と金と金と金と金と金と金と金と  
何と金と金と金と金と金と金と金と金と金と金と  
はまくわんわく草あと傳うりにひばりん  
あまくわんわく草あと傳うりにひばりん  
あまくわんわく草あと傳うりにひばりん  
あまくわんわく草あと傳うりにひばりん  
あまくわんわく草あと傳うりにひばりん

アラユリおれよく酒ぬおハ水の浦ヨリ引く  
はくじとれとくぐりはくじとくぐりはくじ  
大さは眼をめぐらとまきつてこま、老乃がくじ  
まめめくじとくめくじとくめくじとくめくじ  
じくじとくじとくじとくじとくじとくじ

あたにあまくわんわく草あと傳うりにひばりん

旅

おれよく酒ぬおハ水の浦ヨリ引く

旅

おれよく酒ぬおハ水の浦ヨリ引く

旅

中、江、之、水、也、馬、也、

水口様 宿

志士の爲めに死んでゐる事だ  
と

水經

やあゆむとまうを  
いの上に  
かく

卷之三

之  
之  
之

卷之三

諸君之謂也

やくよ来て這ひ方としも  
まよそ

済村氏、ヒウシム

後村氏と申す者  
柳ヶ峰雅波より  
信行

卷之三

株乃都競、志士にて、より後は、ゆりげぬ

やかまちよもじれどそつかゆきのむすめ

の内は皆の像と國々や  
支那より日本へと運び方  
支那より日本へと運び方

題名歌一之綱——丁亥同

まほやかのくはあらわすよ

井川長尾江乃よかくの娘妹乃吉金を送る

井川長左衛門の手本  
佐々木義定の筆

物主よりまことに  
おれも心地ありけど  
尾張國ある城の氏婦主さうかたをかひ唐子  
お生り重にちゆる留美あらゆりおどす  
ちけをとり重い萬えひそり古家よゑの重く下り  
一月ばかりのきの御をてぬと告集はせ  
そげてのひゑとすみやりせめへかのすよや  
よりげを明るとねひ

鶴折八百之吉の手本  
師祐と申すんとてはなりせり  
やうけをよいかきけ放

やまひにえむじくさんと  
まよめりよ  
まはがくわくよこらゆせん  
とくいとむろゆきよ近づくゆ  
まぬあわせよ梅元白あまくさん  
かくとうはらうめいとく時

別

世乃事はれりとたにふをうす。久し旅よりとひよせきをひき  
あひ秋叶無事ある乃は良とぞむりてく

たひ人乃あゆもとみれはめおりえをかひとおひへね乃中多

ほきくひかわやとあむまみくしむすがくゆかー

又馬峰と云ふも

赤駒をしちこままであむまくはのねくらむく

又牛窓と云

西ハ後からハまくくひおまくあふう一またあがせん  
はつまけ東ハうかうかうじんせんして大東ちふ森  
光院又名るすめに矢瀬乃あむとくやこと  
あま尼君ともおまくら元知るにあんゆう  
あくひあじやあくセムをもさりあくまうつまう  
くわせまらえやまにはれとあまたおあまく  
今日るんくせあふをうなぐくらねくつまを  
アたまかに用一西へどモリセハさくハ甚

尼にたりて古事記とおこなわとあるくとて  
きへとせよととせぬとくとくとくとくとくと  
すみせよとくとくとくとくとくとくとくとくと  
庵をあらえめくに射くとくとくとくとくとくと  
にかのかえと花の月をすくほくとくとく  
とくとくとくと心とくとくとくとくとくとくと  
かとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
えくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

行へとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
甲付とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
うううと各嶺よじかへがるうとまくびとす  
うううとすとくとくとくとくとくとくとくとくとくと

山音アニシタアシタアシタアシタアシタアシタアシタアシタアシタ  
山科乃御アリモリに田舎の桂道を修むるの  
又アリタキハ

玉わみを一筋をへそにまくはつあめがうるせんへれ  
とひくらせ後ハとせがうりそりよ様まゆく  
射り氣ハ

むすせーゆのうの今も移うづるるはまくりき龍  
ある人天王寺おやぢを訪ひて小池うき鳥新橋  
よ立とまく引くの橋を看ね著。よみかへ  
まくとゆきまくら飛ハモリく諂うと作、西  
之にゆる成後よひをり

せせん年々歸る思きてゆくもあく家教すをり

ありは詠歌赤松よまがりけ歌は人よきなま種  
みきき乃言とくすすまやくせききまひまくくは  
李石の階ハ幸れり重説よりはす中にもり裏  
かくまきひむゑあらまく他うり是也さる  
はまくーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー  
島宿よまがり歌人ひじりーーーーーーーーーーー  
そありけり

ありあすはまきを乃言詠歌とくは歌乃夜をりよみ歌  
宮は無砂天かう

酒童おまくいひまく歌のよーつまうひを嫌歌乃か  
うねひまうとく、あよよまひ秋絶ハ房よ下やどり仲つ流  
よむくよ歌かけぬりをひき

さきはまくわせはかくまくまとあはれ見えまうう  
むすきりけんちき節傳ひるはうひ  
おきやうおせんあとあめと人の告げ紙  
のまわかくまくまとひうがくおめあつて  
けゆ

雪舟よまくわ行けいがなう宿ひそむかかのふはゆう  
盡山翠紅皴ハ勝残を作りてまふ

巣峰暖鶴

まちあらゆく車く所をきりてとくアレナリのま

尾岐春花

かくこくの君のうめにがれとあめやかくまよ

梅津桺

ほんとうに梅つみさくのまくとあくれまくまくわ  
音ね啼能

やじらまくわくわくれまくれの脚のわくわくわく  
就まく秋月

まくわくまくまくすくまくれや名よがくまの木のトガ

郊城暖雪

まくわくまくまくき緑うくまくまくまくまくまく  
桂水練皮

まくわくまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
ハ松古塔

まくわくまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
安竹郡家門

池の水

池の影

ひよりえむほゆけへんもせりくわせりとくに

かまくす里をかたを小のなまくらをたうれるく

江戸浦川永代教すよき祥蘭とくぬまをさく

官殿再建ノ瑞とく幸ま王詩

香はせく教字や

ちうき代えかを稽むの香あらそひくまゆとくね花の香

鬱仙醉桜若ぬあよやうりてほのスケ

いづけり

ちくわくわくわく歌をくせちや宿の宵一をまぐら  
曉は夏は秋つひつたる桜のあやうき  
を渡るとくまつづき北節もすきめ居とお

ちにりえ太はすすりとくや

すえみをまかうる橋うるる月をほんじゆひくべや  
夏よへうがくよ草色空とみれともむくる  
うのす

仙人の意をされひの宮あれハ道す草す常盤がなん

度

ほのれとくよんまくすくはうり緋きのまくすれ  
ゆやすき夏のああきとあきかふるす夜ハ花くはくく  
夏のれゑのりてとあめせばくあやくはくくく  
かくすむじめくめとくくくみる我心たうとくあき

鶴鳴東がよみか傳す一ノ國すくすく年

から音つすやすりにけく幕あくせた

おひるはすとまくはくはく  
かくはくをうながすてくはくはく  
おひるはくはくをうながすてくはくはく  
おひるはくはくをうながすてくはくはく  
おひるはくはくをうながすてくはくはく  
おひるはくはくをうながすてくはくはく  
おひるはくはくをうながすてくはくはく  
おひるはくはくをうながすてくはくはく

